

A K I N A R I I S E K I

秋 成 遺 跡

携帯電話基地局建設に伴う埋蔵文化財発掘調査

平成19年(2007)8月

久留米市教育委員会

序

久留米市は、筑後川と耳納連山の豊かな自然を背景に、福岡県南の中核都市として中心的な役割を担っています。歴史を紐解くと律令期に筑後地方を統括する筑後国府が設置されたことに端を発し、近世においては久留米藩二十一万石の城下町として発展し、現在の市街地形成の礎となっております。

歴史の流れの中で人々の営みの記憶が文化財として刻まれ、現代にまで受け継がれて来ました。しかし、近年の発展は生活の利便性向上とともにその対価として貴重な文化財が失われつつあります。

これら文化財を一つでも多く、後世に伝える一手段として、教育委員会では発掘調査を行い、記録保存の措置を講じています。

本書は、18年度に発掘調査を実施した秋成遺跡の報告を収録しています。本書が久留米の歴史を学ぶ基礎資料として、牽いては文化財保護行政に対する理解とその普及の一助として役立つことができれば幸いに存じます。

末文となりましたが、発掘調査に際して多大なご協力とご理解をいただきました株式会社エヌ・ティ・ティ・ドコモ九州様、地権者■■■■様をはじめ、関係各位に対しまして、厚く御礼申し上げます。

平成19年 8 月31日

久留米市教育委員会

教 育 長 石 川 集 充

例 言

1. 本書は、平成18年度に久留米市文化観光部文化財保護課が携帯電話基地局建設に伴い「株式会社 エヌ・ティ・ティ・ドコモ九州」より委託を受けて実施した、秋成遺跡の第1次発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は久留米市文化観光部文化財保護課が久留米市教育委員会より委任を受けて行ない、久留米市文化観光部文化財保護課職員の江島伸彦が担当した。
3. 本書に掲載した遺構実測図は調査担当者の他、別府智典・大熊澄子・小西富美子が作成した。また、遺物実測、拓本、製図は調査担当者の他、文化財保護課職員の白木守と非常勤職員の原田志保が行なった。
4. 空中写真を除く遺構写真は担当者が撮影した。また、遺物写真は撮影機材トヨビュー45GⅡを使用し、白黒フィルムはT-MAX100（6×9判）を用いて、久留米市埋蔵文化財センターにおいて担当者が撮影した。尚、本文中の遺物番号と写真図版の遺物番号は同一である。
5. 本書に使用した遺構図は国土調査法第Ⅱ座標系（日本測地系）を基に作成した。図面の方位は全て座標北を示す。
6. 本書に使用した遺構表記は下記の略号による。

S A …… 柵列	S D …… 溝状遺構	S I …… 竪穴住居	S K …… 土坑
S P …… ピット	S X …… その他の遺構	K …… 甕棺墓	
7. 本書に収録した遺物及び調査に関わる記録類は、全て久留米市埋蔵文化財センターにおいて収蔵・保管され、活用される予定である。
8. 本書の執筆・編集は、江島が行った。

本文目次

第1章	はじめに	
1.	調査に至る経緯	1
2.	調査体制	1
第2章	位置と環境	
1.	地理的環境	2
2.	歴史的環境	2
第3章	調査の記録	
1.	調査の経過	4
2.	検出遺構と出土遺物	5
a)	基本層序	5
b)	弥生時代	5
	竪穴住居	
	土坑	
	甕棺墓	
	柵列	
c)	歴史時代	13
	溝状遺構	
第4章	小 結	
1.	秋成遺跡第1次調査の概要	15
2.	SD1について	15

挿図目次

第1図	調査地周辺の遺跡分布図 (1/25,000)	2
第2図	調査地周辺図 (1/5,000)	3
第3図	秋成遺跡第1次調査遺構配置図 (1/100)	4
第4図	SI6・7実測図 (1/40)	6
第5図	SI6・7出土遺物実測図 (1/4)	6
第6図	SI9実測図 (1/40)	7
第7図	SI9出土遺物実測図 (1/4・1/8)	8
第8図	SI9・包含層出土遺物実測図 (1/2)	9
第9図	SK2・3実測図 (1/20)	10
第10図	SK5・K5実測図 (1/40)	11
第11図	K5出土遺物実測図 (1/8)	12
第12図	SA30実測図 (1/40)	13
第13図	SD1土層断面実測図 (1/40)	13
第14図	SD1出土遺物実測図 (1/4・1/2)	14

図版目次

図版 1－(1)	調査区より北を望む
図版 1－(2)	調査地全景（西より）
図版 2－(1)	調査区北側遠景（西より）
図版 2－(2)	S I 6・9 完掘状況（西より）
図版 2－(3)	S I 6 完掘状況（北より）
図版 2－(4)	S I 7 完掘状況（東より）
図版 2－(5)	S I 9 完掘状況（西より）
図版 2－(6)	S I 9 土器出土状況①（北より）
図版 2－(7)	S I 9 土器出土状況②（北西より）
図版 2－(8)	S K 2 完掘状況（南より）
図版 3－(1)	S K 3 完掘状況（北東より）
図版 3－(2)	S K 3 完掘状況（南西より）
図版 3－(3)	S K 4 完掘状況（西より）
図版 3－(4)	S K 5 土坑検出状況（北西より）
図版 3－(5)	S K 5 甕棺状況（西より）
図版 3－(6)	S K 5 掘形状況（北より）
図版 3－(7)	S D 1 完掘状況（東より）
図版 3－(8)	S D 1 東壁土層断面（西より）
図版 4	出土遺物①
図版 5	出土遺物②
図版 6	出土遺物③

表 目 次

第 1 表 秋成遺跡第 1 次調査出土遺物観察一覧表	16
----------------------------	----

第1章 はじめに

1. 調査に至る経緯

本調査は、平成18年10月10日に地権者である[REDACTED]氏より久留米市田主丸町1234-2における携帯電話鉄塔建設に伴う事前審査の依頼が提出されたことに始まる。依頼地の周辺は、周知の埋蔵文化財包蔵地であるため、久留米市文化観光部文化財保護課は、試掘調査を平成18年10月30日に実施した。その結果、地表より約40～50cmで遺構を検出し、弥生土器片等が出土した。開発内容から遺跡の削平は避けられず、発掘調査を行なう必要性が生じた。

その後、開発主体者のエヌ・ティ・ティ・ドコモ九州より埋蔵文化財発掘調査の依頼が提出され、調査を開始する運びとなった。調査開始時期が年度も押し迫った時期であったため、報告書作成業務は翌年度に行うことを確認し、「秋成遺跡第1次発掘調査協定書」を平成18年11月29日に取り交わし、「秋成遺跡第1次発掘調査委託契約書」を同日に締結した。

調査は、平成18年12月22日より開始し、年末年始の休暇を挟み、翌年の1月11日に全ての調査を終了した。対象面積は393㎡でそのうち調査面積は90㎡である。なお、出土品整理作業は、調査と並行して土器洗浄、接合作業の途中で一旦終了し、平成19年4月1日より6月22日まで接合、注記作業、実測、トレース等を行った。

2. 調査体制

調査体制は以下のとおりである。

平成18年度（調査）・平成19年度（報告書作成）

調査委託	エヌ・ティ・ティ・ドコモ・九州（代表取締役 井上 登）			
調査主体	久留米市教育委員会	教育長	石川集充	
調査総括	久留米市文化観光部	部長	緒方眞一	次 長 辻 文孝
		文化財保護課	課 長	関 知彦
		課長補佐兼主査		
		立石雅文 山口 淳		
		事務主査	松村一良 近澤康治	
		庶務担当	権藤節子（～平成18年4月）	
			本庄ともえ（平成18年5月～）	
		試掘調査担当	近澤康治 本田岳秋 吉村由美子	
		調査・報告書作成担当	江島伸彦	
		整理担当	畠中和子 原田志保	

発掘調査臨時職員

石井弘子・上野ヒデ子・大熊澄子・大塚ヒロ子・熊谷秋子・小西富美子・田中トシ子・倉富スミ子・
江頭 敏・別府智典

出土品整理作業臨時職員

石川裕子・山ノ内文子

第2章 位置と環境

1. 地理的環境

秋成遺跡が所在する久留米市田主丸町秋成は、久留米市東端、うきは市との境に位置し、筑後川左岸に広がる沖積平野上に立地する地域である。秋成地区は、田主丸町の東部、国道210号線を挟んだ南北一帯に広がる地域で、北は船越、西に常盤地区が接する。この船越、秋成及び船越地区の北西部に広がる長栖地区、巨瀬川南に所在する鷹取地区の4地区で旧船越村を構成し、現在では小学校校区としてその名を残している。船越村の由来は『和名抄』に船越郷として記されることによる。

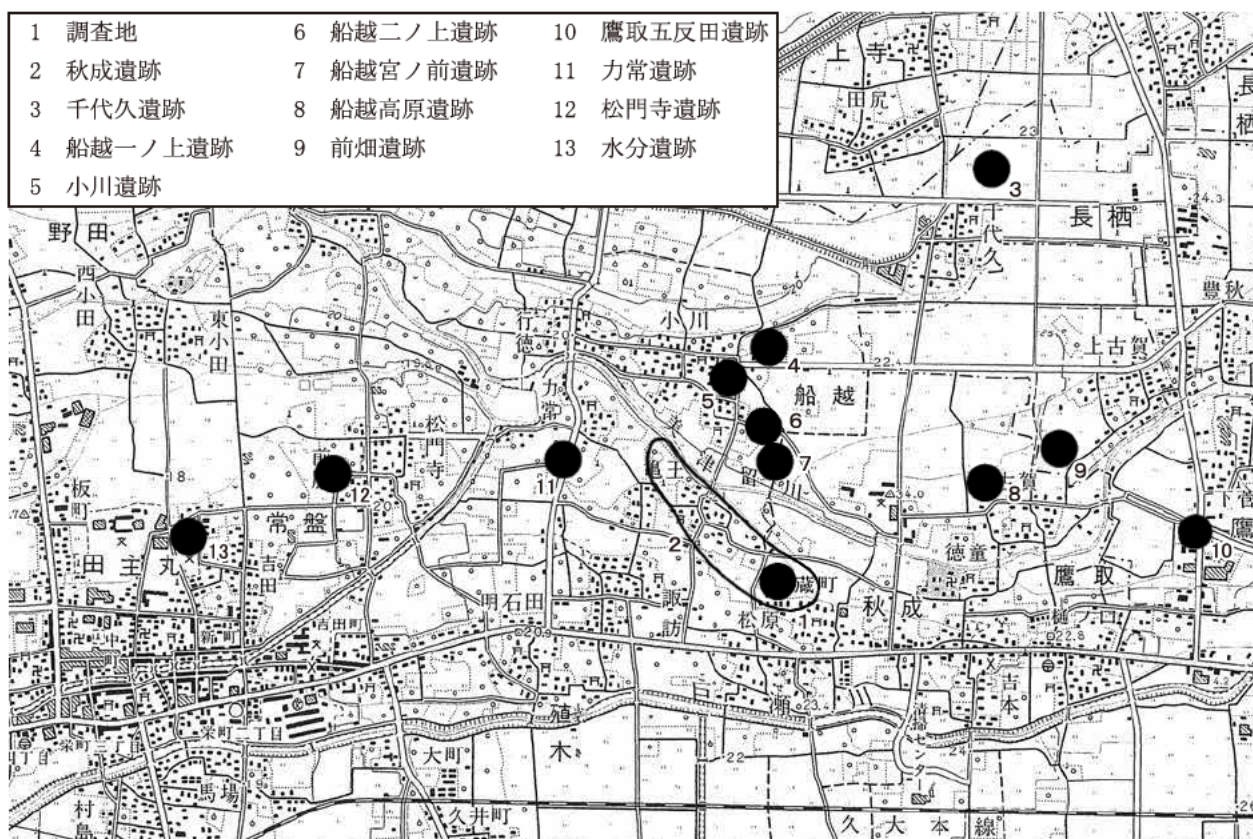
船越校区の中程には美津留川が東西に貫流し、左岸は河岸段丘が形成されている。右岸より北部一帯は筑後川の氾濫原であり、概ね、平坦な地形であるが、旧河川的作用による自然堤防の名残りとして微高地状の地形が筑後川と並走するように東西に長く点在する。

筑後川兩岸に広がる両筑平野は、弥生時代になると古処山系・水縄山系より派生した丘陵より流出した土砂による沖積作用によって形成されたもので砂、シルト、粘土から構成されている（註1）。

2. 歴史的環境

秋成遺跡は、福岡県教育委員会が作成した遺跡分布図にも記載され、過去、同教育委員会によって、秋成亀王遺跡として発掘調査が実施されている（註2）。農作業中の不時発見による調査であったため、甕棺1基のみの調査であったが、報告書には秋成遺跡の西側に広がる亀王集落一帯が甕棺墓地帯であることが述べられている。

この甕棺は合口甕棺であり、上下甕ともに「T」字状の口縁を有すもので最大径を胴上半部に持つ。丸みのある胴下半部には上甕には三角形突帯、下甕には断面三角形の突帯が各々、1条巡る。調整は内外面



第1図 調査地周辺の遺跡分布図（1／25,000）

ともに丁寧なナデで仕上げられ、ハケ目を全てナデ消し、器壁も7mmと薄く、精緻な作りである。また、外面には黒色顔料を塗布するものである。

この他、弥生時代の遺跡としては、秋成遺跡の西方2kmの地点、田主丸町常盤に所在する水分遺跡が筑後川の段丘上に立地する。弥生時代前期から中期、古墳時代後期所産の遺跡で、特筆すべき点は板付Ⅱ式土器が出土しており、浮羽地方では当遺跡のみの出土である。

秋成遺跡周辺では美津留川の右岸に船越一ノ上遺跡が微高地上に立地する。平成6年度に県営圃場整備事業に伴って発見、調査された遺跡で弥生時代中期中葉から後期前半を主体とする集落跡である。また、甕棺が15基出土しているが、全て小形棺であり、成人用の大形棺は皆無という状況である。甕棺墓群は弥生時代中期後半から後期前半に比定されよう。

隣接する、うきは市吉井町長栖には長栖前畑遺跡が所在する。船越一ノ上遺跡同様に、氾濫原に残る微高地上に立地し、弥生後期から古墳時代前期に比定される遺跡で竪穴住居群が確認されている。さらにその南方の吉井町鷹取には福岡県教委が調査した鷹取五反田遺跡が所在する。この遺跡からも甕棺が出土しており、弥生時代中期から後期に比定されている。

古墳時代になると田主丸町から吉井町にかけて所在する船越高原遺跡が美津留川右岸の微高地上に立地する。前期に比定される集落跡である。また、船越二ノ上、宮ノ前遺跡は美津留川を挟んで秋成遺跡と対峙する形で所在し、古墳後期から奈良時代に比定される集落遺跡である。両遺跡からは多数の竈を布設する竪穴住居が確認されている。

ここに記した弥生時代に比定される遺跡の地山は砂質土が主であり、一部には礫層が露出する箇所もあるため、旧河川の氾濫原に近い微高地上の立地であることが窺え、前述の弥生時代以降の沖積作用によって形成されたものであろう。船越高原、宮ノ前、二ノ上遺跡の地山は茶褐色のシルト質土であることから弥生時代の堆積の上に更に洪水による堆積作用によって形成されたものであると考えられる。

(註1) 大庭孝夫編 2001『堂畑遺跡Ⅱ』浮羽バイパス関連埋蔵文化財調査報告書第20集 福岡県教育委員会

(註2) 栗原和夫編 1985『田主丸古墳群』田主丸町文化財調査報告書第2集 田主丸町教育委員会



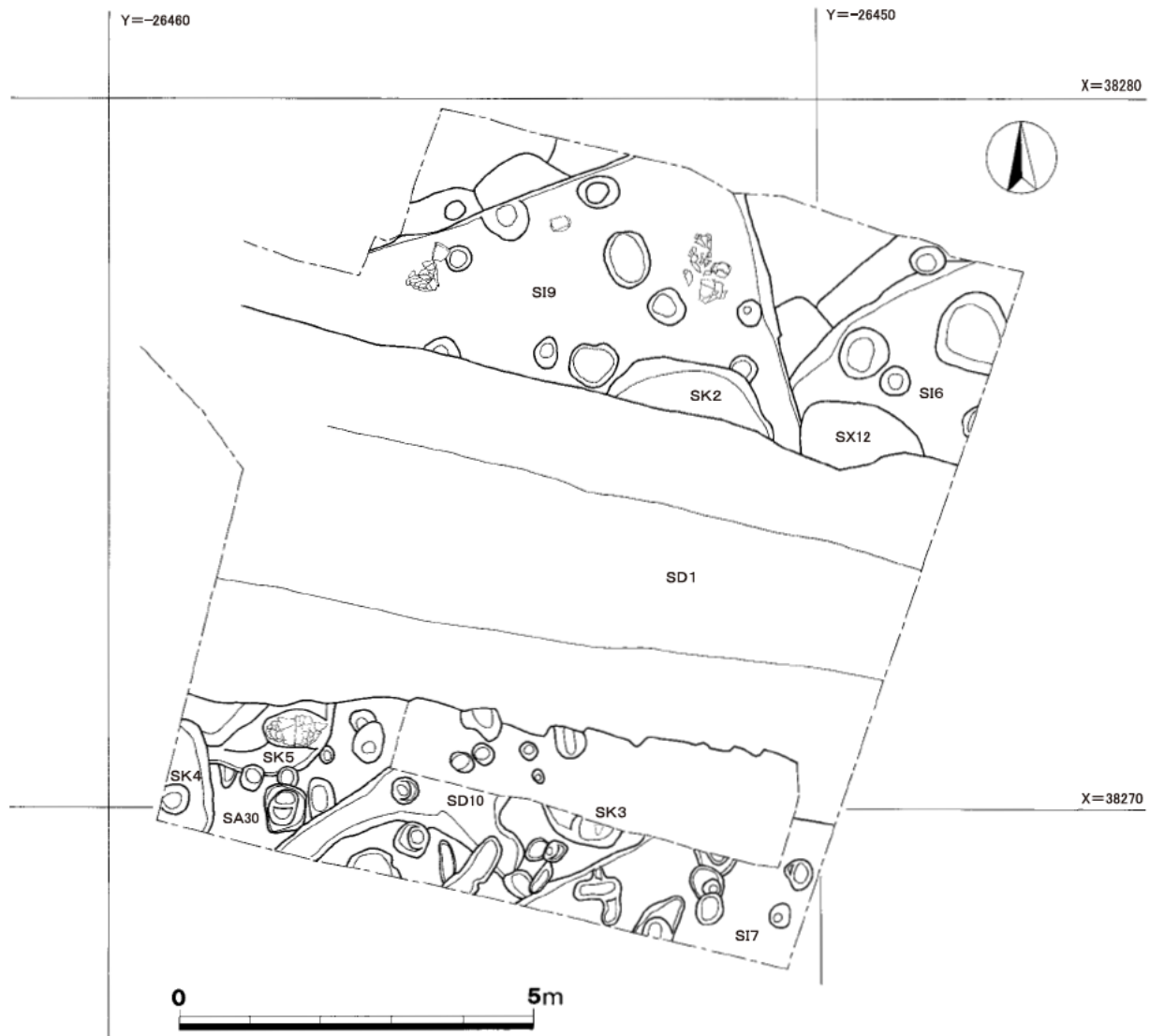
第3章 調査の記録

1. 調査の経過

調査地は、河岸段丘上の一端に広がる。北東側には段差が生じ、その比高差は1.5mを測る。調査区の標高は約22mである。

調査は平成18年12月22日に重機0.28mを投入し、表土剥ぎを開始した。地表より約40～50cmの深さで遺構面に達した。同日に作業員を投入し、遺構検出を開始した。その際、調査区の中央部に東西方向に貫流する溝状遺構が検出された。その他の遺構は、竪穴住居、土坑、ピットを検出したが、溝状遺構に先行するものであり、大半が溝状遺構によって削平を受けている。

翌日より溝状遺構の掘削に取り掛かった。溝状遺構の深さは予想以上に深く、調査の予定は大幅に遅れる結果となった。そのため、年内で終了の予定であったが、年末、年始を挟んで作業を再開し、翌年1月11日に全景写真を撮影し終了した。遺構配置図は遺跡調査汎用システムを用いて行い、甕棺墓は1/10による実測を行なった。



第3図 秋成遺跡第1次調査遺構配置図 (1/100)

なお、記録写真はカラーリバーサル、モノクロ6×7で撮影した。遺跡調査汎用システムを用いて作成したデータは「遺構くん a i」で編集し、保存している。

2. 検出遺構と出土遺物

調査地は土器散布状況、前述の福岡県教委の調査並びに試掘結果より弥生時代の遺構の検出が予想され、本調査で確認された竪穴住居、土坑については当該時期の所産である。しかし、調査区の中央に横たわる溝状遺構は全ての遺構を切り、土師器等の遺物が出土していることから古墳～奈良時代の遺構であろう。

今回の調査で検出した遺構は、以下のとおりでその配置状況は第3図の遺構配置図にて示している。

弥生時代

竪穴住居 3軒、小形甕棺 1基、土坑 4基、柵列 1基、ピット群

古墳～歴史時代

溝状遺構 1条

a) 基本層序

表土は約20～25cmあり、その直下に約10～15cmの灰褐色土が堆積する。地山は黄灰色土で締まりがありやや砂質が強い。この黄灰色土の堆積は約20～25cm程でその下には、黄白色砂質土が30～40cm、堆積している。以下、順次、灰白色砂礫層（20～30cm）、白灰色粘質土（30cm～）となる。埋土は、黒灰色土で、粒の目は細かく粘質である。

b) 弥生時代

竪穴住居

S I 6（第4図 図版2－5） 調査区北西隅より検出。遺構の一部が調査区外である上、SD1、SI9、SX12（倒木痕）に切られるため、平面プランの詳細は不明である。残存状況からやや弧を描くことから円形住居の可能性が考慮されるが、前記理由から判然としない。壁体は鉛直状に掘り込まれ、深さは20～30cmを測る。中央部分へ傾斜があり、僅かに楕円状を呈す。床面は黄白色砂質土であった。床面よりピットを検出したが、深度は浅く、柱穴とするには疑問が残る。

遺物は、他の竪穴住居跡より若干古く、上げ底の甕底部片、黒塗りの壺口縁片等が出土している。

出土遺物（第5図 図版4）

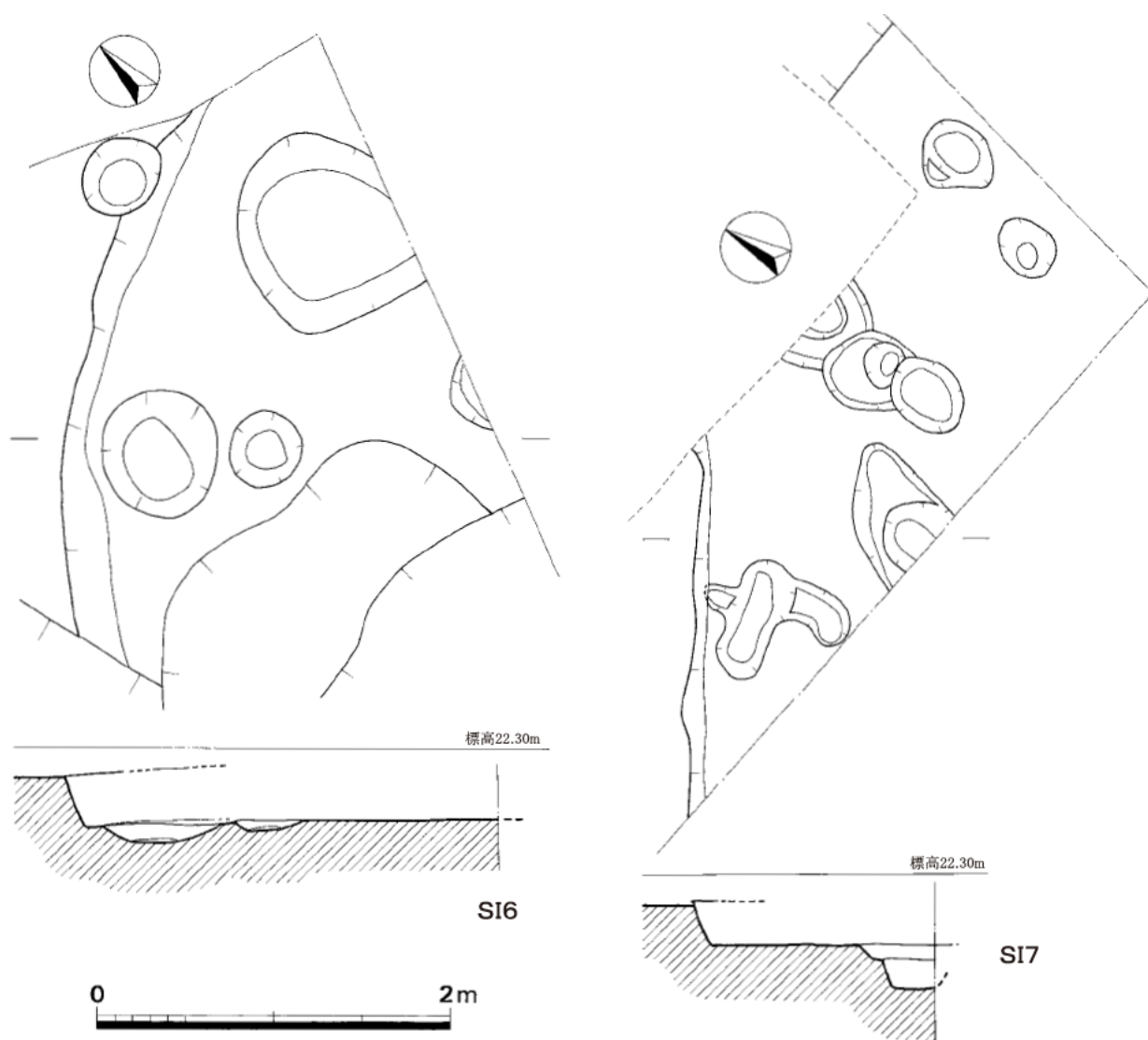
1は広口壺の口縁。口縁端には沈線が1条巡る。2は甕の底部。細身で上げ底をなす。底部端の調整は横ナデを施し、ハケ目をナデ消す。

S I 7（第4図 図版2－6） 調査区南東隅より検出。遺構の大半が調査区外である上、SD1に切られる。そのため、遺構の検出箇所は少量且つ床面より検出したピット群の配置も判然とせず、詳細については不明である。平面プランは残存状況から方形を呈すものと考えられる。SI6同様に壁体は鉛直方向に掘り込まれる。床面は中央部分へ傾斜があり、楕円状を呈す。深さは20～30cmを測る。床面は黄白色砂質土であった。

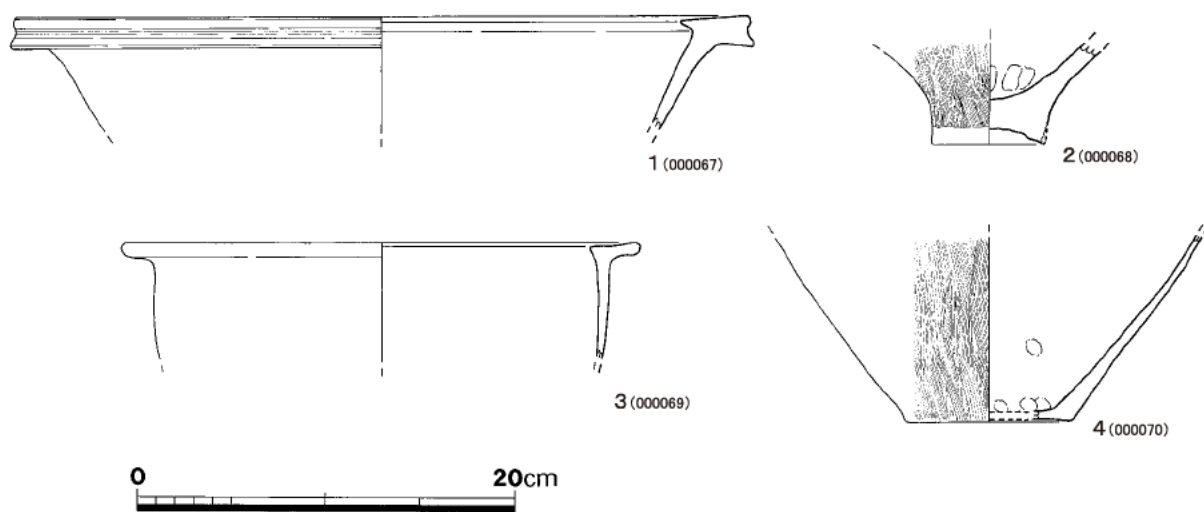
遺物は、甕の口縁部片及び底部が出土している。その他については、細片が占めており、時期を示すものは少ない。

出土遺物（第5図 図版4）

3・4は甕。3は「く」字状の口縁を有す。4は底部で、立ち上がりに緩やかな膨らみがある。



第4図 SI6・7実測図 (1/40)



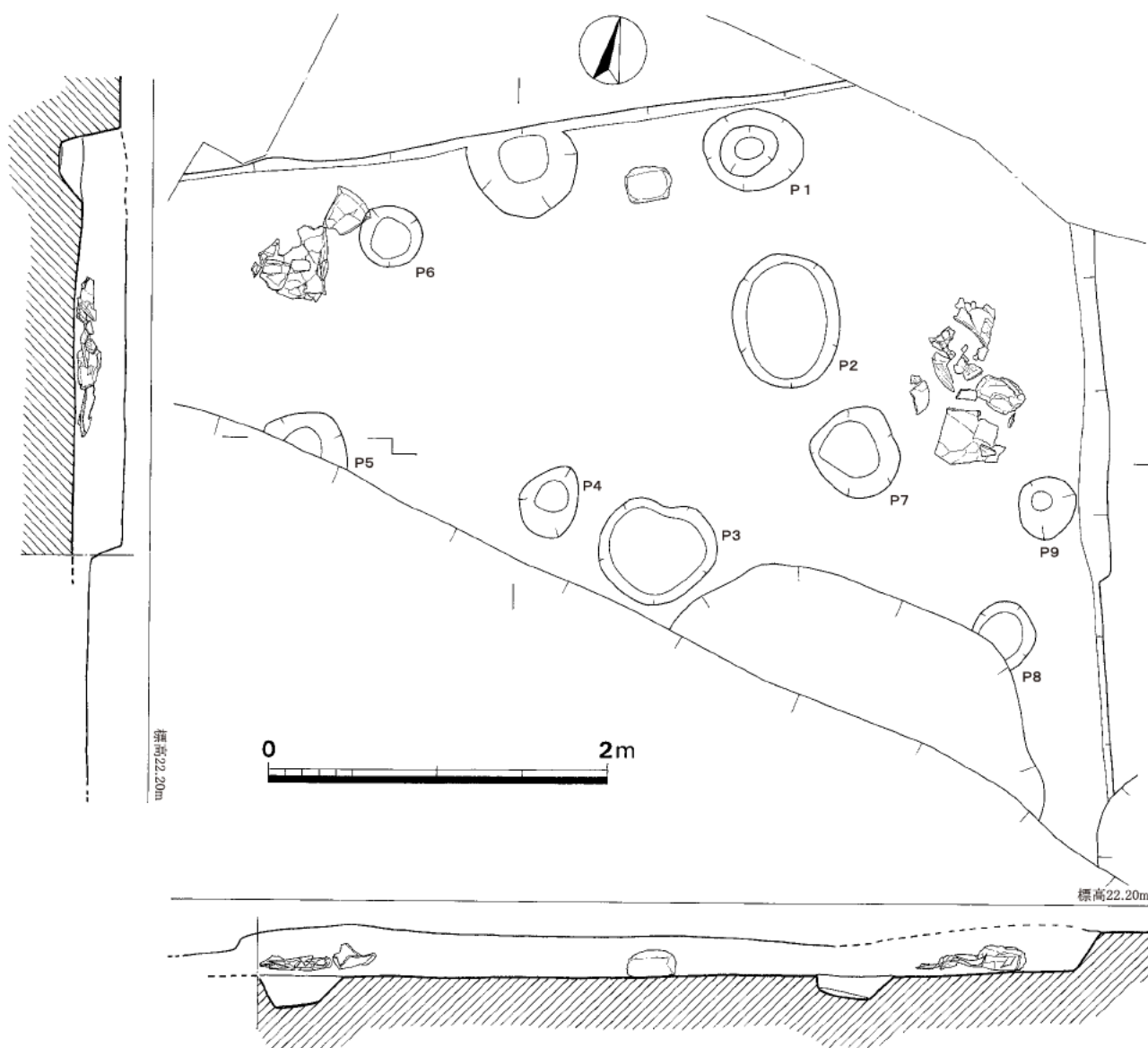
第5図 SI6・7出土遺物実測図 (1/4)

S I 9 (第6図 図版2-7) SD1に切られ、北東隅と西壁が調査区外のため未掘である。平面プランは、前述したように復元可能な状態では無いが、方形であることは確かである。残存長は東西に5.35m、南北に4.25mを測る。床面までの深さは0.25mで、床面は遺構検出面の黄灰色土を掘り抜き、黄白色砂質土に達している。主軸方向はN-20°-Wである。

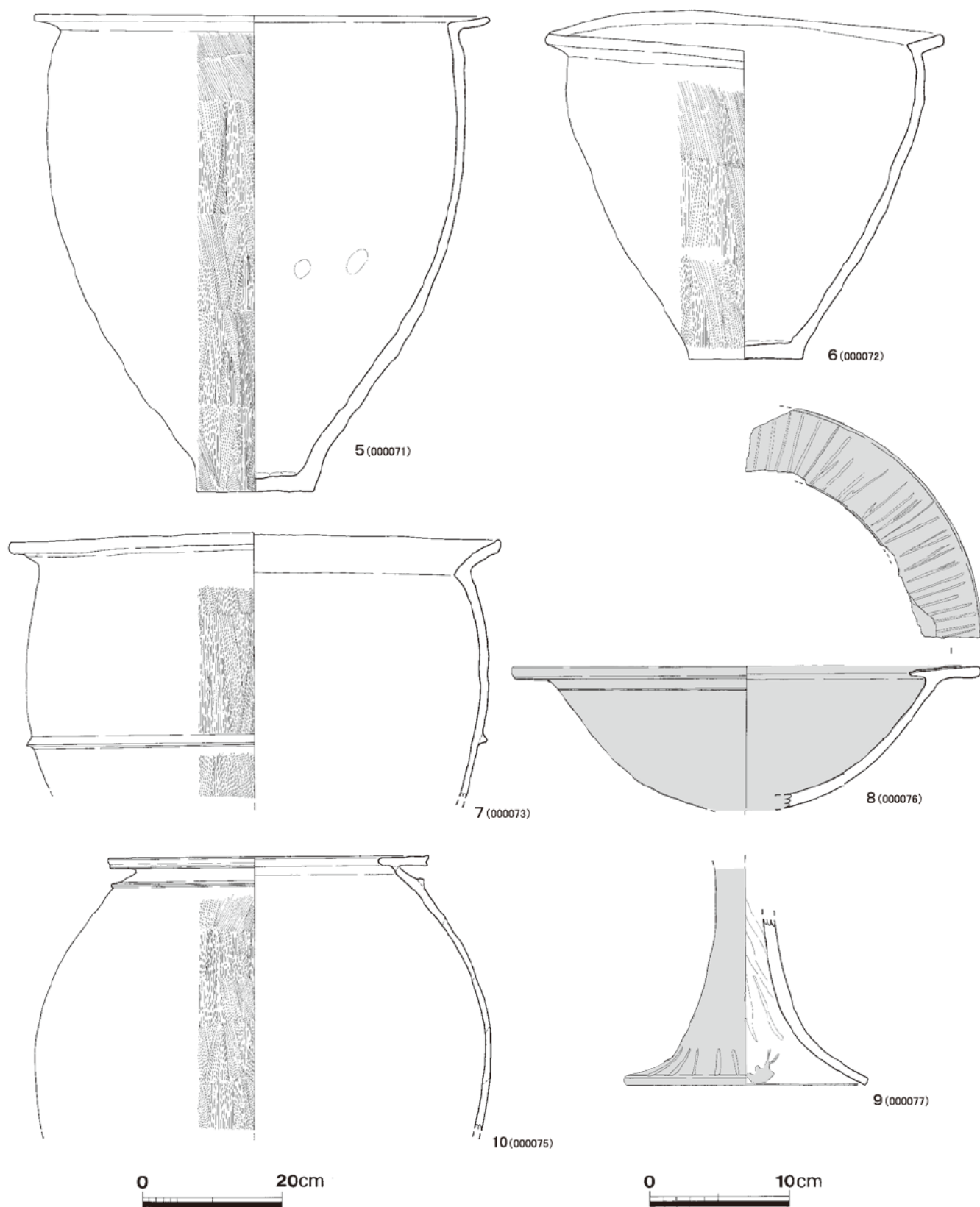
遺物の集中区域が北壁西側と東壁に2箇所認められ、前者からは甕、鉢、鉄鏝が、後者から大形の甕が出土している。前者については、床面直上からの出土であり、遺構に伴うものであろう。後者は、床面より土器群が5cm程、浮いた状態で出土しており、埋土に差異は認められないものの別遺構の可能性も否定できない。

出土遺物 (第7・8図 図版4・5)

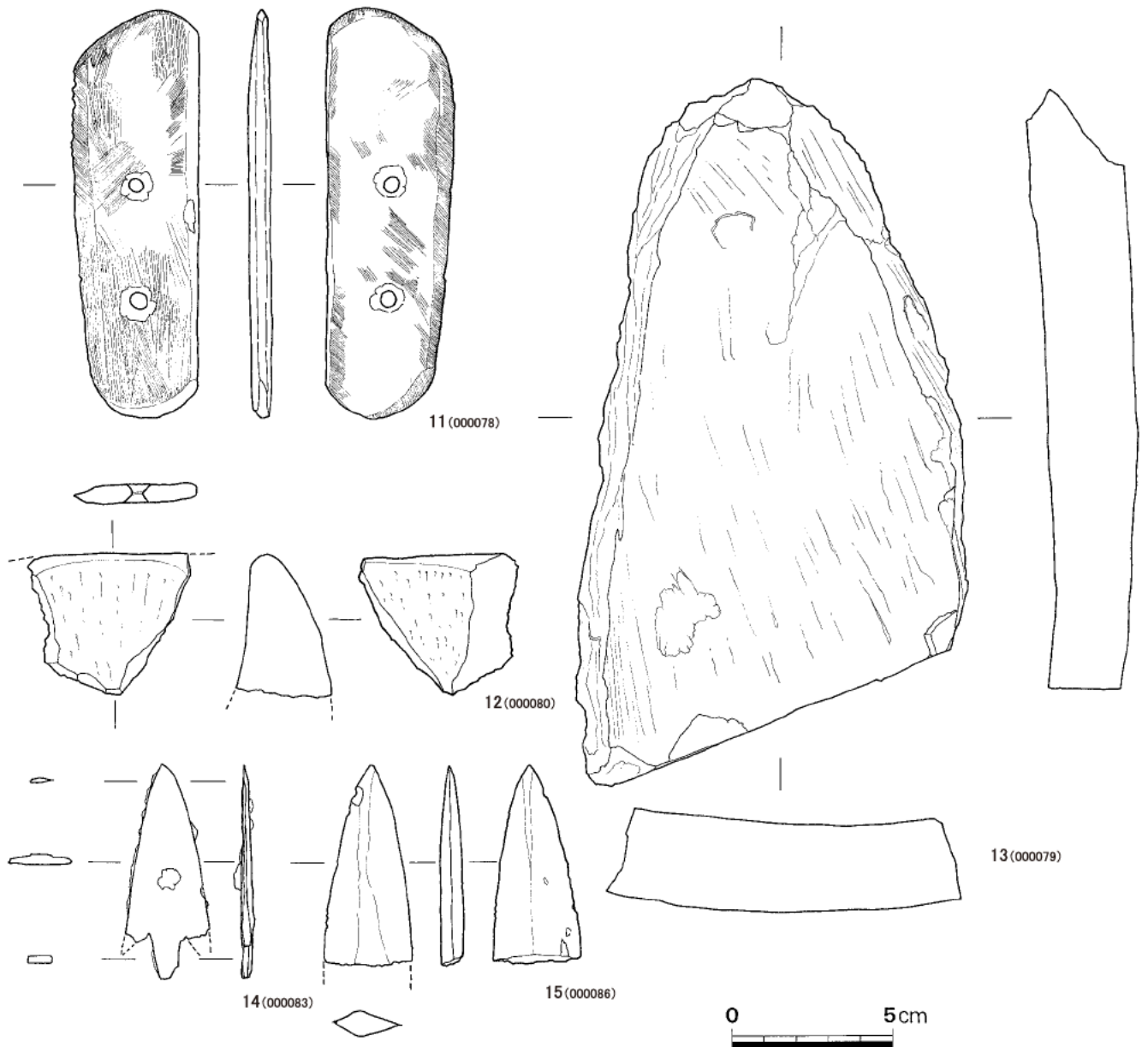
5～7は甕。5は口縁部のみ横ナデを施す他は、ハケ目調整を行う。6は歪みが著しい。調整は口縁部と底部端に横ナデを施す。7は6と比較して頸部の内傾が大きい。最大径の直下に断面三角形の突帯が巡る。ハケ目は明瞭で、口縁部の横ナデ調整によってナデ消される。8・9は高杯。全面に丹を塗布する。



第6図 S I 9実測図 (1/40)



第7図 SI9出土遺物実測図 (1/4・1/8)



第8図 S I 9・包含層出土遺物実測図（1／2）

9の口縁には暗文が施される。口縁下には微細な突帯が1条巡る。調整は磨きを丁寧に施すが、単位は不明瞭である。胴部の丹は下弦状の線を連続して塗布する手法である。9の裾部にも暗文を施す。裾部裏には丹塗りの際に溢れたものであるだろうか、丹が斑点状に付着する。脚上半部に絞り痕が残る。10は大形甕。頸部の内傾が著しく、断面三角形の突帯が1条巡る。下半部が残存していないが、最大径は胴部中位よりやや上に持つ。11は石庖丁。正面観は長方形を呈す。両端は不均整で図面下端部は、研磨による再加工を施したのであろう。そのため、刃部を切る形で研磨痕が残る。両面より研ぎ、刃部を作出する。斜軸方向に研磨を施すが、一部、横方向に研ぐ。刃部には刃毀れ状、小剥離状に使用痕が認められる。棟付近にも丁寧な研磨を施す。穿孔は棟と刃部の中間に2箇所穿つ。石材は粘板岩。12・13は砥石。12は一部のみ残存。凝灰岩質の石材を用いる。同様の石材が住居内から出土しているが、接合には至っていない。裏面は礫面で研磨痕は認められない。13の側面は割れ面で整形を行っているのであろう。研ぎ面は凹形を呈し、中心部が最も深い。裏面は礫面で研磨痕は認められない。片岩製か。14は鉄鏃。有茎鏃であるが筥代部及

び関の一部が欠損する。全体的に扁平である。15は石剣の鋒。鎬は不明瞭。丁寧に研磨されたようであるが、痕跡が認められない。

土坑

SK2 (第9図 図版2-10) SD1、SI9に切られる。平面プランは東西に長い楕円形を呈し、長軸2.4m、残存する短軸0.76mを測り、深さ0.45mである。出土遺物は主に弥生土器の細片であり、詳細については不明である。主軸方向はN-76°-Wである。

SK3 (第9図 図版3-1) SD1に切られる。平面プランは東西に長い楕円形を呈し、長軸2.34m、残存する短軸0.72mを測り、深さ0.92mである。出土遺物は弥生土器片が主である。甕の胴部片が床面近くから出土している。図示はしていないが、外面には丁寧なハケ目、内面にはナデ・オサエを施す。その他の出土遺物は弥生土器の細片である。主軸方向はN-69°-Wである。

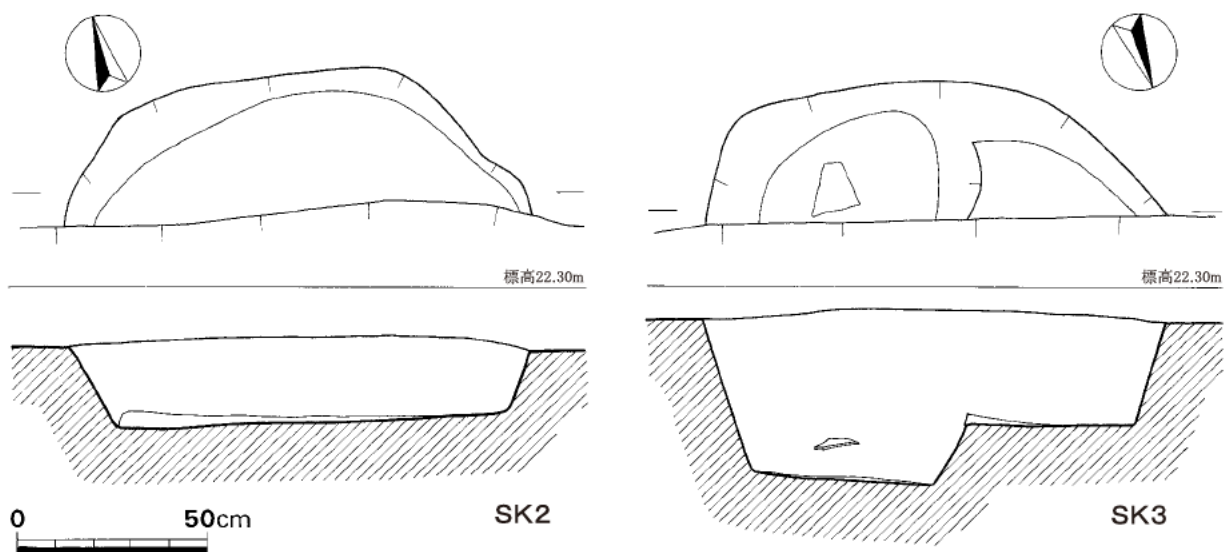
SK4 (図版3-3) SK5、SA30P1を切る。遺構の一部が調査区外であるため、平面プランは不明である。深さ1.1mを測る。土坑東壁側の床面には粘土塊が検出された。出土遺物は皆無であった。周辺の状況から甕棺の掘形である可能性も否定できない。

SK5 (第10図 図版3-4) SD1、SK4に切れ、遺構の一部が調査区外であるため、平面プランは不明である。土坑の掘形から小形棺が出土しているが、調査時、埋土が同じであり区分できず、同一遺構として検出した。報告においてもそのまま記載している。

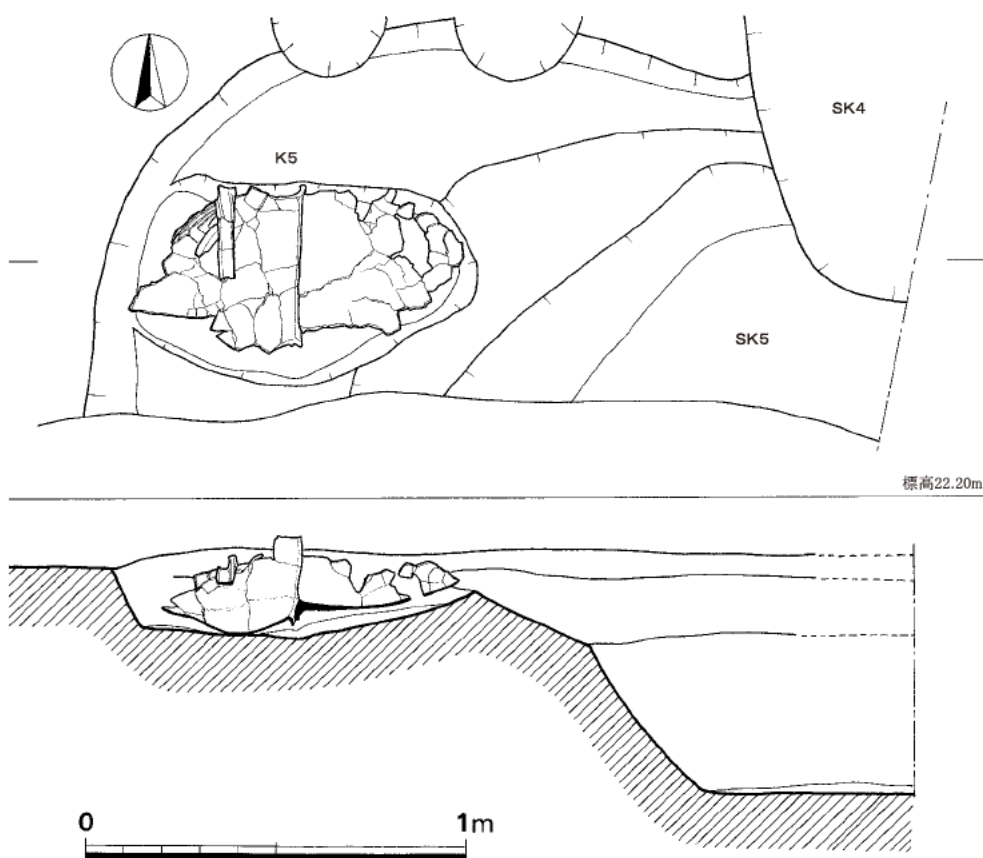
しかし、土坑の掘形は最深部へ向かって斜行しているが、小形棺は水平を保って埋葬されているため、別遺構の可能性も否めない。別の遺構ならば、先後関係は、小形棺の下甕に当たる甕の底部付近が大きく欠落しているため、土坑に切られていると考える。

掘形最深部の深さは1.28mを測り、床面は平坦である。前述したように掘形の東側に傾斜がみられ、楀鉢状の断面を有する。

出土遺物は、弥生土器甕の細片が主であるが、甕棺の口縁部片が出土している。遺構全体を把握していないので推測の域を出ないが、SK5に後出するSD1の掘削時に、甕棺が露出し、破壊されたのではない



第9図 SK2・3実測図(1/20)



第10図 SK5・K5実測図(1/40)

いかと考える。SD1の出土遺物にも甕棺の一部である破片が混入している事象がこのことを示唆しているのではなかろうか。

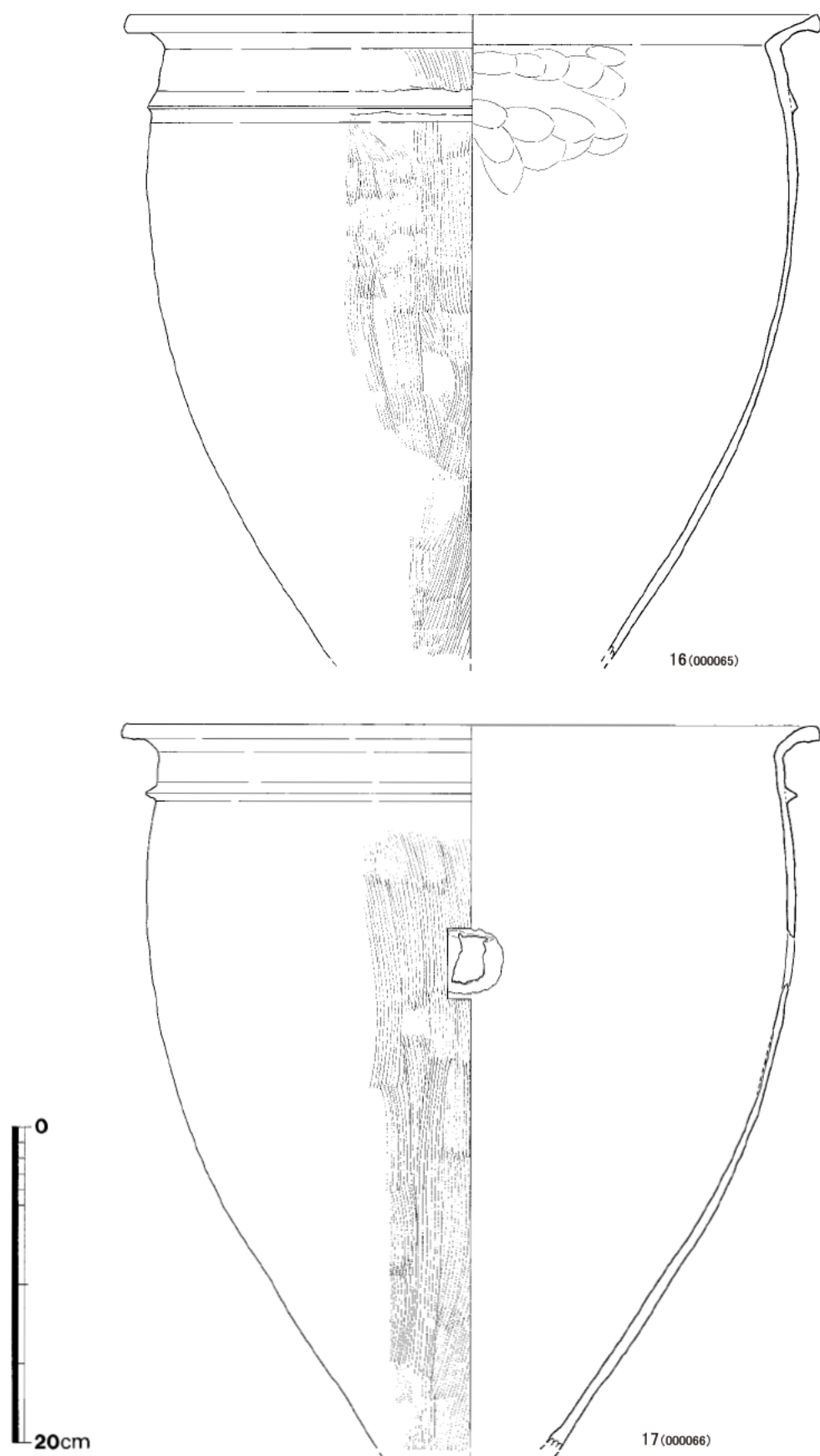
甕棺墓

K5 (第10図 図版3-5・6) 小形棺は、合口で上下棺ともに口縁を有する。口縁部の周りには粘土による目貼りはなく、上甕が下甕を覆うように合わせられている。検出時、上下甕ともに口縁及び胴部は上部まで残っていたが、土圧のためか、歪みが生じている。そのため整理時に接合を試みたが、口縁部は土圧によって歪んだ部分のパーツが欠落し、口縁部を全周させるには至らなかった。底部は上下甕ともに欠落する。掘形の長軸は、2.0m、短軸は0.8mを測り、深さは0.4mである。主軸方向はN-86°-Eである。

出土遺物 (第11図 図版6)

16・17は甕棺。16が上甕。前述した理由により残存状況は埋設状態の下半部のみを実測している。口縁は、「く」字状を呈し、頸部が内傾する。口唇部に厚みがあり、調整は反時計周りに、横ナデを施す。口縁端より約6cm下に三角突帯が1条巡り、上下に接合ナデを施す。そのため、ハケ目はナデ消される。口縁部端より約12cm下で最大径をなす。胴部は底部に向かって緩やかに細る。調整はハケ目を精緻に施し、単位は明瞭である。17のハケ目と比較して単位は短い。

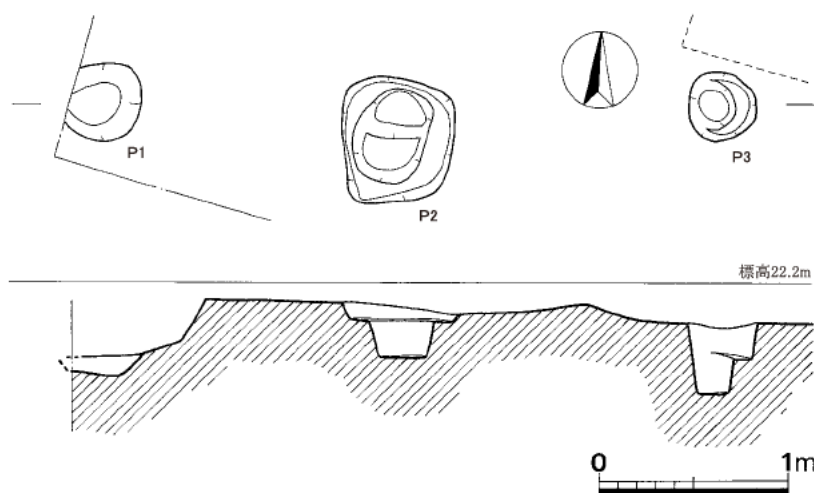
17が下甕。口縁部は「く」字状を呈す。16と比較して口縁の外反部分は短い。また、頸部の内傾も僅かであり、16の口縁内に収まるよう意図的に作成されている。口唇部は厚みが顕著である。胴部上半部に孔を穿つ。この部分は、甕棺埋設時の最も低い場所であり、水抜きのために穿ったものであろう。調整は口縁部に横ナデ、突帯部周辺は接合ナデを施す。胴部はハケ目調整を行い、16と比較して単位が長い。



第11図 K 5 出土遺物実測図 (1 / 8)

柵列

S A30 (第12図) 調査区の南西部より検出。SK 4にP 1が切られる。P 1は調査区隅にあり、調査区外へ延びる可能性が考慮される。また、調査区外へピットが広がり掘立柱建物と成り得る可能性も捨てきれないが、今回の調査では確認していないため、最低限の可能性を示唆するに留める。他のピットの配置状況を考慮すると南へ広がる可能性が高い。



第12図 S A30実測図 (1/40)

ピットは3つ検出。掘形は、やや方形に近い楕円形を呈し、径約15~20cmを測る。P 2のみ、掘形が方形を呈す。出土遺物は、時期を確定するものがなく、詳細は不明である。

c) 古墳時代後期から歴史時代

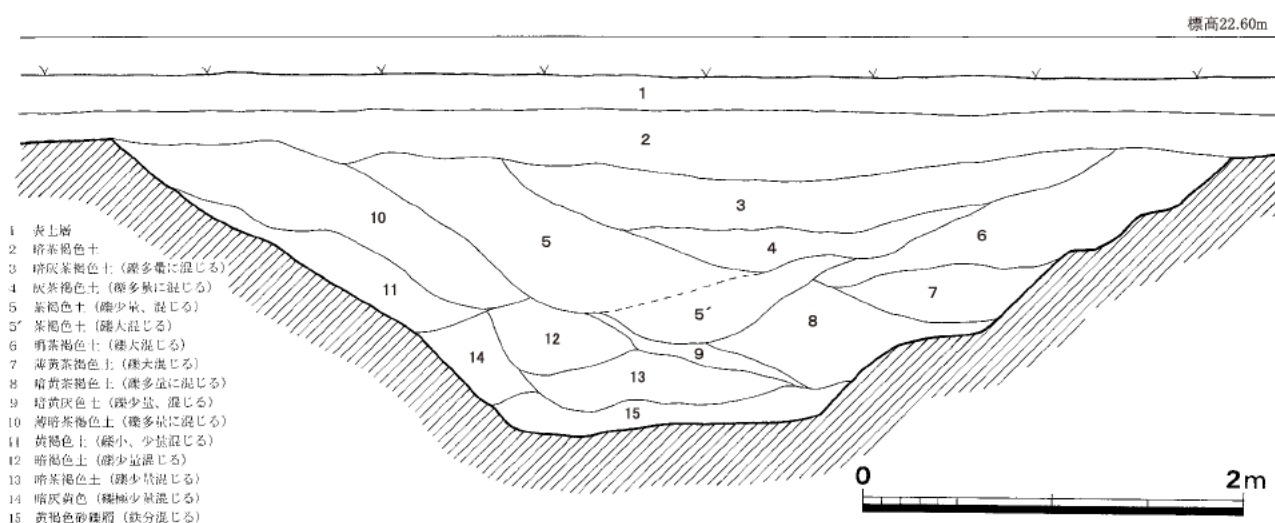
溝状遺構

SD 1 (第13図 図版3-8) 調査区の中央より検出し、東西方向に延びる。幅は5.95mを測り、深さ1.70mである。断面形状は逆台形を呈す。埋土は13層に分けられ、2・6・8層に礫が多く混入する。大略、埋没過程は北より埋まり始め、後、南側へと移るが、幾度か、掘り直しを行っているのであろうか、7・11・13層が菱形の形状を呈している。確証はないが、1~3層、4~7層、8~10層、11~13層の単位に分けることが可能である。13層には赤色の鉄分が含まれ、水の流れがあったと推定される。

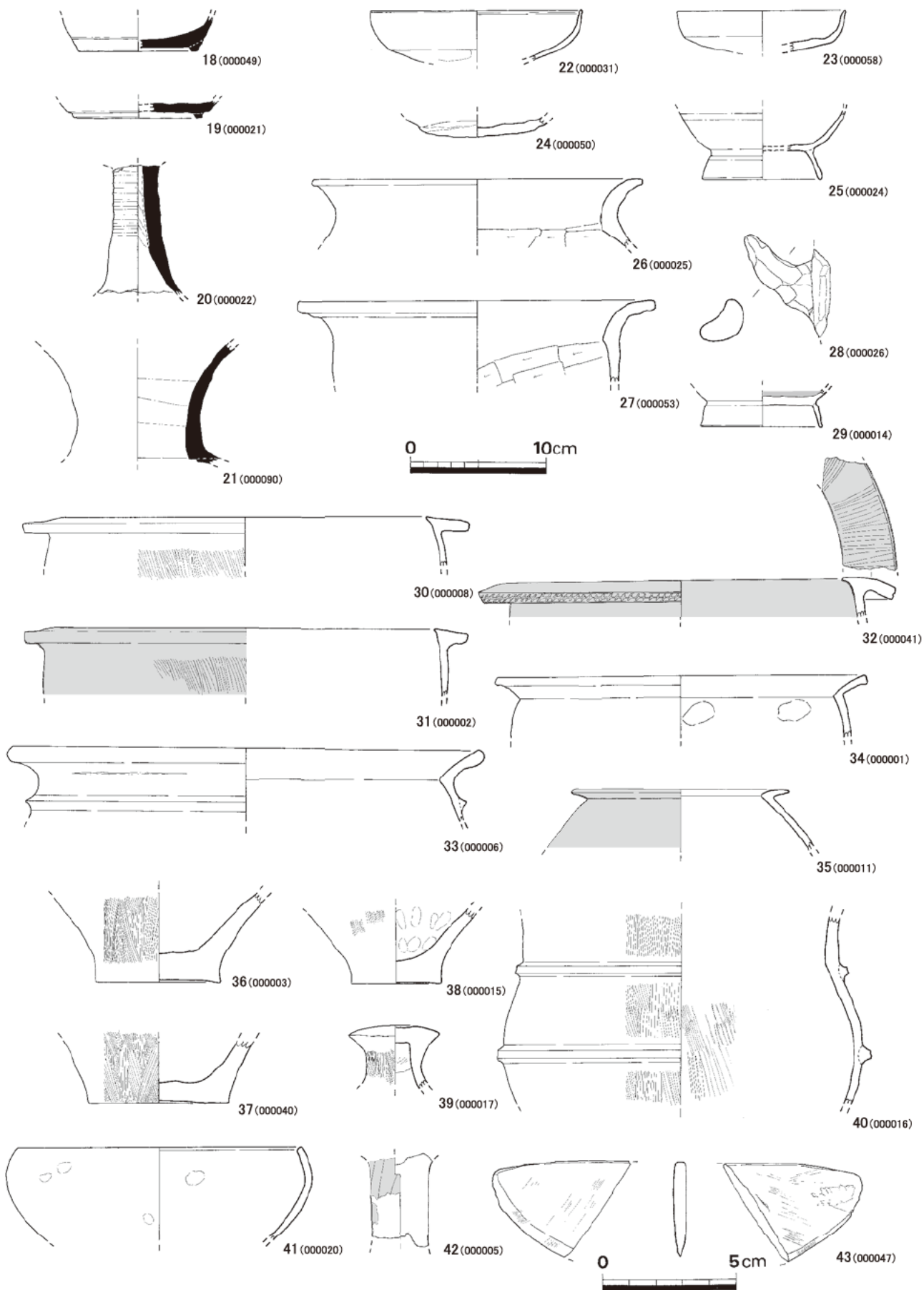
出土遺物は、弥生土器壺、甕、高杯口縁及び底部、須恵器坏・甕、土師器坏、黒色土器A類碗等であった。弥生土器は丹を塗布したものが多い。古墳後期から歴史時代の遺物が9~13層に集中していた。

出土遺物 (第14図 図版5)

18・19は須恵器碗。底部のみ残る。調整は横ナデ。18は高台と底部の境が不明瞭である。19は高台が低い。20は須恵器高杯の脚部。調整は横ナデ。内側には絞り痕が残る。21は須恵器甕の頸部。胴部と接合部



第13図 SD 1土層断面実測図 (1/40)



第14図 SD 1 出土遺物実測図 (1/4・1/2)

が残る。胎土が緻密で焼成が良好である。22～24は土師器坏。22の口縁内側には1条、沈線が巡る。24は底部の接合部分がナデ消されず、段を有す。25は土師器碗。高台が高く、底部に張りがない。26は土師器甕。内面にはケズリ調整を施す。27は土師器の鉢か。斜下方向にケズリ調整を施す。胴部に張りがなく、口縁に1段、段を有す。28は土師器の甑把手。細身で上面が凹状を呈す。29は黒色土器A類の碗。底部はヘラ切りである。30～38は弥生土器の甕。32の口縁端には沈線に刻み目を施す。全面に丹を塗布する。口縁には暗文を施す。33は頸部に接合時の痕跡が残る。35は弥生土器の無頸壺。丹を塗布する。36は細身の底部を有する。39は弥生土器の蓋把手。内面に絞り痕が残る。40は弥生土器の壺。突帯を2条有す。頸部は外反して立ち上がり、胴部は丸みを帯びる。41は鉢。底部付近に丸みを帯びる。42は高杯の脚部。43は石庖丁。正面観は半月形を呈す。両刃で研磨痕があり、刃部の端に使用痕が残る。

第4章 小 結

1. 秋成遺跡第1次調査の概要

秋成遺跡は、第2章でも述べたように遺跡の調査としては、過去、不時発見による甕棺の調査のみである。甕棺が存在する他は詳細について不明な点が多い状況であった。今回の調査では、約90㎡の調査とはいえ、対岸の船越一ノ上遺跡と同様の様相を示す住居跡、小形棺を検出したこと、また、弥生時代後期の鉄鏃の出土は、旧田主丸町内では緒言であり、1つの成果といえよう。

秋成遺跡の時期については、S I 6の堅穴住居が若干、古く、中期前半～後半、S I 7・9が後期前半の所産であろう。また、小形棺についても後期前半に位置付けて問題ないであろう。この他、S D 1からは中期前半から後半にかけての遺物が散見され、周辺に当該時期の遺構が存在する可能性を示唆している。これらを踏まえて遺跡としての時期は中期前半～後期前半の遺跡であると考えられよう。この様相は、船越一ノ上遺跡と大差なく、美津留川を挟んで同時期の集落が広がっているであろう。

船越一ノ上遺跡第1次調査地内の南側には、旧河川の痕跡が残り、遺跡の南に所在する小川、船越宮ノ前、二ノ上遺跡では弥生時代の堅穴住居、甕棺の類いは皆無の状況で、僅かに土坑が1例存在するのみである。これらは茶褐色のシルト質土の上に形成された遺跡であることから弥生時代には網目状に河川が広がっていたか、低地であった可能性が看取できる。

また、船越一ノ上遺跡第1次調査では甕棺が出土しているにも係らず、大形棺が全く出土していない。一帯では秋成亀王遺跡遺跡の大形甕棺が見受けられるのみである。この甕棺の時期が中期後半であり、船越一ノ上、秋成遺跡の甕棺と時期差が生じることになるが、両遺跡の墓域として、亀王遺跡周辺が該当するのではなかろうか。河岸段丘上段の斜面上に当たるため、立地からも最適な場所であると推測される。

2. S D 1について

調査地内の中央を東西に貫流する溝状遺構で下層より古墳時代後期の土師器坏、甕、8世紀中頃の須恵器碗、黒色土器A類の碗等が出土し、上層にも土師器細片が散見される。弥生時代の所産ではないのは確実であるが、出土遺物から古墳時代後期から9世紀前半までと時期幅は広く、該当時期については今後の調査に委ねたい。この他、S A 30の時期については遺物が無い上、S K 4の時期が不明であるため、時期の確定はここではさけておくが、S D 1の時期に近い可能性が高い。

〈参考文献〉

齋部麻矢編『船越二ノ上遺跡』浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第12集 1997 福岡県教育委員会
丸林禎彦編『船越一ノ上遺跡』田主丸町文化財調査報告書第8集 1997 田主丸町教育委員会

第1表 秋成遺跡出土遺物観察表

遺物 No.	出土遺構	種別	器種	法 量			色 調		調 整			胎土	備考	登録番号
				口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	外面	内面	外面	内面	底面			
1 第5図	S I 6	弥生土器	壺	(28.8)	—	(6.1)	口縁部黒色 頸部黄橙色	黒色	横ナデ →磨き	横ナデ →磨き	—	微砂粒、雲母		200622 000067
2 第5図	S I 6	弥生土器	甕	—	6.0	(5.3)	浅黄橙色	にぶい褐色	ハケ目、 底部:横ナデ	ナデ・オサエ	ナデ	細砂粒、砂粒(1~2mm)、 雲母		200622 000068
3 第5図	S I 7	弥生土器	甕	(27.0)	—	(6.3)	黄橙色	にぶい橙色	口縁部: 横ナデ	横ナデ	—	細砂粒、砂粒(1~2mm)、 石英、雲母		200622 000069
4 第5図	S I 7	弥生土器	甕	—	8.8	(9.7)	浅黄橙色	浅黄橙色	ハケ目	ナデ・オサエ	ナデ	細砂流、 砂粒(1~2mm)		200622 000070
5 第7図	S I 9	弥生土器	甕	33.6	8.3	34.1~ 34.4	黄橙色	黄橙色	口縁部: 横ナデ	口縁部: 横ナデ	ナデ	細砂流、 砂粒(1~2mm)	黒斑あり	200622 000071
6 第7図	S I 9	弥生土器	甕	28.6	(8.2)	22.1~ 24.7	明黄褐色	にぶい褐色	ハケ目、 底部:横ナデ	ナデ・オサエ	ナデ	細砂粒、雲母細砂粒、 砂粒(1~2mm)	黒斑あり	200622 000072
7 第7図	S I 9	弥生土器	甕	35.3	—	(19.1)	にぶい 黄橙色	橙色	口縁部: 横ナデ	口縁部: 横ナデ	—	微砂粒、砂粒(1~2mm)、 石英、雲母	黒斑あり	200622 000073
8 第7図	S I 9	弥生土器	高杯	—	17.2	(15.6)	丹塗り:橙色、 地:橙色	赤色	磨き	絞り痕	横ナデ	微砂粒、砂粒(1~2mm)、 石英、雲母	黒斑あり、素部に硝 文、底部内面に丹あり	200622 000076
9 第7図	S I 9	弥生土器	高杯	(33.6)	—	(10.2)	赤色、 一部黒色	浅黄橙色	磨き	磨き	—	微砂粒	丹塗り、硝文あり、 磨き不明瞭	200622 000077
10 第7図	S I 9	石製品	甕	(22.9)	—	(19.6)	浅黄橙色、 一部橙色	—	口縁部: 横ナデ	口縁部: 横ナデ	—	細砂粒、砂粒(1~2mm)、 石英		200622 000075
11 第8図	S I 9	石製品	石庖丁	長3.9	幅12.5	厚0.6	—	—	研磨	—	—	砂岩		200622 000078
12 第8図	S I 9	石製品	擦石	長(4.4)	幅(5.0)	厚2.4	—	—	片面研磨	—	—	凝灰岩		200622 000080
13 第8図	S I 9	石製品	砥石	長21.9	幅12.0	厚2.7	—	—	片面研磨	側面摂理面	裏面礫面	片石		200622 000079
14 第8図	S I 9	鉄製品	鉄鍬	長6.6	幅2.6	厚0.4	—	—	—	—	—	—		200622 000083
15 第8図	包含層	石製品	石剣	長(6.2)	幅2.7	厚0.7	—	にぶい褐色	研磨	—	—	頁岩		200622 000086
16 第11図	SK 5	弥生土器	甕棺 (上)	44.0	—	40.7	にぶい褐色、 一部黒褐色	にぶい褐色、 一部黒褐色	口縁部: 横ナデ	口縁部: 横ナデ	—	砂粒(1~2mm)、石英、 長石、多量の角閃石、雲母		200622 000065
17 第11図	SK 5	弥生土器	甕棺 (下)	—	—	48.0	にぶい褐色	灰白色	口縁部: 横ナデ	口縁部: 横ナデ	—	砂粒(1~2mm)、石英、 長石、角閃石、雲母		200622 000066
18 第14図	SD 1	須恵器	椀	—	(8.8)	(2.5)	灰白色	灰黄色	横ナデ	横ナデ	横ナデ	微砂粒	高台に接合 ナデ	200622 000049
19 第14図	SD 1	須恵器	椀	—	(1.2)	(9.4)	灰白色	青灰色	横ナデ	横ナデ	横ナデ	微砂粒		200622 000021
20 第14図	SD 1	須恵器	高杯	長(9.5)	幅3.6	—	青灰色	灰色	横ナデ	絞り痕	—	微砂粒		200622 000022
21 第14図	SD 1	須恵器	甕	—	—	(8.1)	灰白色	褐色	横ナデ	横ナデ	—	微砂粒細砂流、 砂粒(1~4mm)		200622 000030
22 第14図	SD 1	土師器	坏	(15.1)	—	(3.8)	褐色	黄褐色	ナデ・オサエ	ナデ・オサエ	—	微砂粒、砂粒(1~2mm)		200622 000031
23 第14図	SD 1	土師器	坏	(12.4)	—	(3.1)	褐色	褐色	横ナデ → ナデ・オサエ	口縁部: 横ナデ	—	微砂粒、赤色粒子少量		200622 000058
24 第14図	SD 1	土師器	坏	—	8.7	(1.6)	にぶい褐色	黄褐色	横ナデ	横ナデ	ナデ	微砂粒、砂粒(1~2mm)、 石英、雲母		200622 000050
25 第14図	SD 1	土師器	椀	—	(8.8)	(5.1)	褐色	褐色	横ナデ	横ナデ	接合ナデ	微砂粒、赤色粒子		200622 000024
26 第14図	SD 1	土師器	甕	(24.4)	—	(5.1)	褐色	黄褐色	横ナデ	横ナデ・ ケズリ	—	細砂粒、砂粒 (1~2mm)、雲母		200622 000025
27 第14図	SD 1	弥生土器	甕	(26.2)	—	(5.9)	黄褐色	褐色	口縁部: 横ナデ	口縁部: 横ナデ	—	細砂粒、砂粒(1~2mm)、 石英、雲母		200622 000053
28 第14図	SD 1	土師器	甕	長(6.3)	3.8	1.9	褐色	褐色	ナデ	—	—	微砂粒、砂粒(2~3mm)、 赤色粒子		200622 000026
29 第14図	SD 1	黒色土器	椀	—	9.0	(2.6)	にぶい 黄褐色	—	横ナデ	磨き	篋切り	微砂粒、 砂粒(1~2mm)		200622 000014
30 第14図	SD 1	弥生土器	甕	(26.4)	—	(3.6)	にぶい 黄褐色	黒色	横ナデ	横ナデ	—	細砂粒、砂粒 (1~2mm)、石英		200622 000008
31 第14図	SD 1	弥生土器	甕	(27.6)	—	(4.9)	浅黄褐色	褐色	口縁部: 横ナデ	ナデ・オサエ	—	微砂粒、雲母	丹が少量残る	200622 000002
32 第14図	SD 1	弥生土器	甕	(23.8)	—	(2.8)	丹塗り:赤色	丹塗り:赤色	磨き	磨き	—	微砂粒	口縁部硝文 磨き不明瞭	200622 000041
33 第14図	SD 1	弥生土器	甕	(35.0)	—	(5.2)	灰白色	灰色	横ナデ	横ナデ	—	微砂粒、 砂粒(1~2mm)		200622 000006
34 第14図	SD 1	弥生土器	甕	(27.0)	—	(4.6)	浅黄褐色	浅黄褐色	横ナデ	ナデ・オサエ	—	細砂流、石英、雲母細砂粒、 砂粒(1~2mm)、石英、雲母		200622 000001
35 第14図	SD 1	弥生土器	甕	—	9.2	(6.2)	にぶい 黄褐色	褐色	ハケ目、 底部:横ナデ	ナデ・オサエ	ナデ	細砂流、石英、雲母細砂粒、 砂粒(1~2mm)、石英、雲母		200622 000011
36 第14図	SD 1	弥生土器	甕	—	6.7	(5.5)	褐色	浅黄褐色	ハケ目、 底部:横ナデ	ナデ・オサエ	ナデ	細砂粒、砂粒(1~2mm)、 石英、雲母	ハケ目不明瞭	200622 000003
37 第14図	SD 1	弥生土器	甕	—	(10.4)	(4.7)	にぶい褐色	黄褐色	ハケ目	ナデ・オサエ	ナデ	細砂粒、砂粒 (1~2mm)、石英		200622 000040
38 第14図	SD 1	弥生土器	蓋	—	幅6.7	(4.7)	浅黄褐色	—	ナデ・ハケ目	絞り痕	—	細砂粒、砂粒 (1~2mm)、雲母		200622 000015
39 第14図	SD 1	弥生土器	甕	—	—	(10.8)	浅黄褐色、 丹塗り:赤褐色	黒色、一部 にぶい黄褐色	ハケ目	ハケ目、 ナデ・オサエ	—	細砂粒、砂粒 (1~2mm)、雲母	丹塗り少量残る	200622 000017
40 第14図	SD 1	弥生土器	壺	(15.8)	—	(4.1)	褐色	褐色	ナデ・オサエ	ナデ・オサエ	—	細砂粒、砂粒(1~2mm)、 石英、雲母		200622 000016
41 第14図	SD 1	弥生土器	鉢	(21.0)	—	6.7	褐色	にぶい褐色	ナデ・オサエ	ナデ・オサエ	—	細砂流、 砂粒(1~2mm)		200622 000020
42 第14図	SD 1	弥生土器	高杯	長(6.9)	幅4.2	—	丹塗り:赤色	地:浅褐色	磨き	—	—	細砂流、 砂粒(1~2mm)	丹塗り	200622 000005
43 第14図	SD 1	石製品	石庖丁	長(3.6)	幅(5.1)	厚0.5	—	—	研磨	—	—	緑泥片岩		200622 000047

写真図版



(1) 調査区より北を望む



(2) 調査地全景 (西より)



(1) 調査区北側遠景 (西より)



(2) SI 6・9完掘状況 (西より)



(3) SI 6完掘状況 (北より)



(4) SI 7完掘状況 (東より)



(5) SI 9完掘状況 (西より)



(6) SI 9土器出土状況① (北より)



(7) SI 9土器出土状況② (北西より)



(8) SK 2完掘状況 (南より)



(1) SK3完掘状況(北東より)



(2) SK3完掘状況(南西より)



(3) SK4完掘状況(西より)



(4) SK5土坑完掘状況(北より)



(5) SK5甕棺検出状況(北西より)



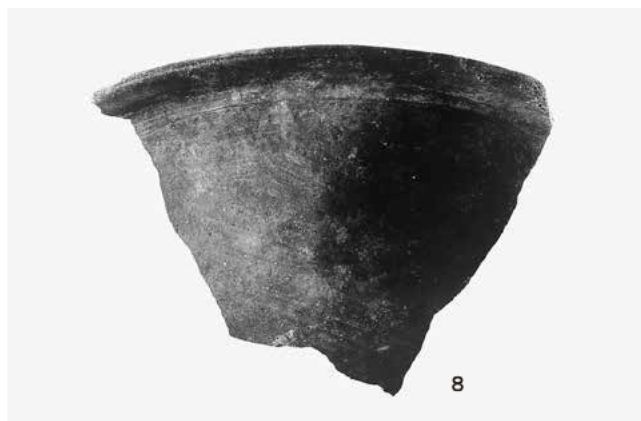
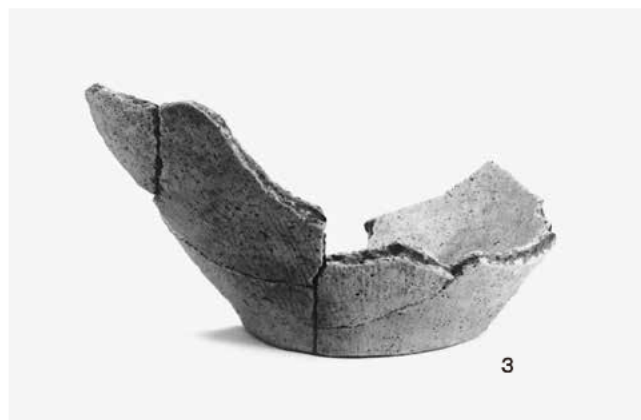
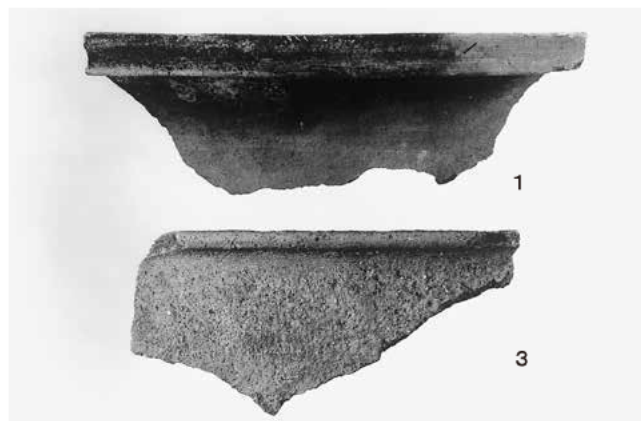
(6) SK5甕棺掘形状況(西より)

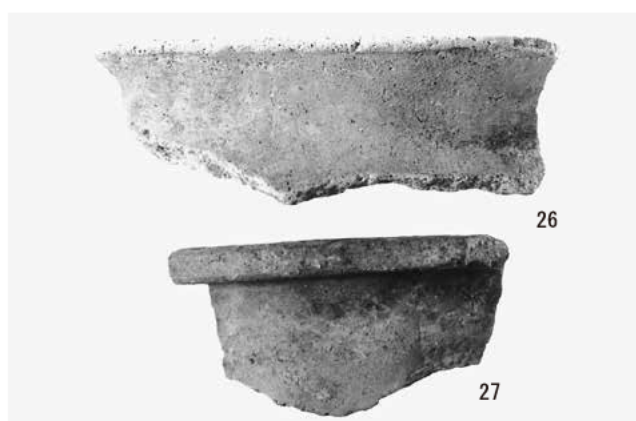
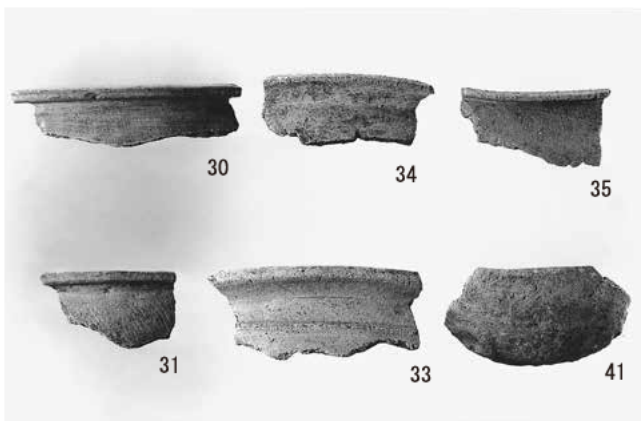
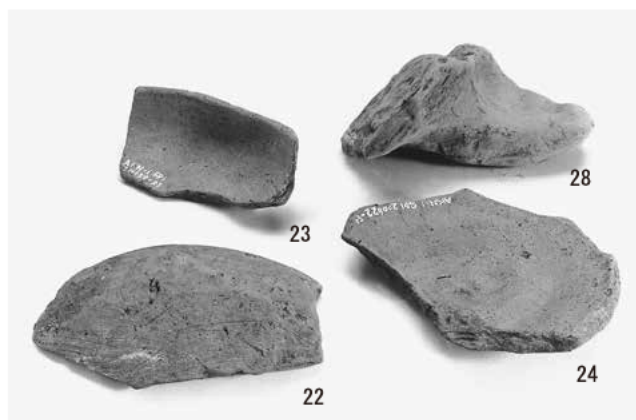
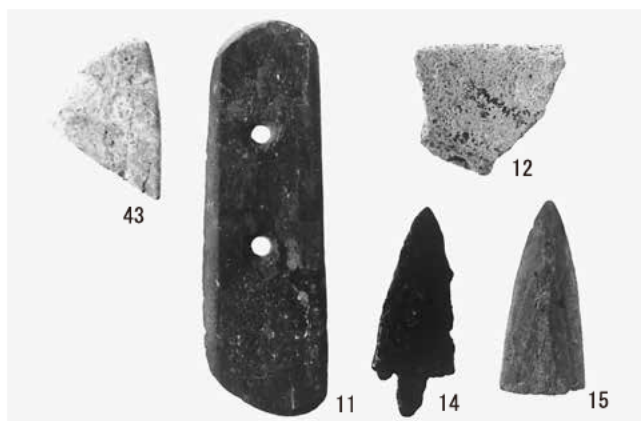


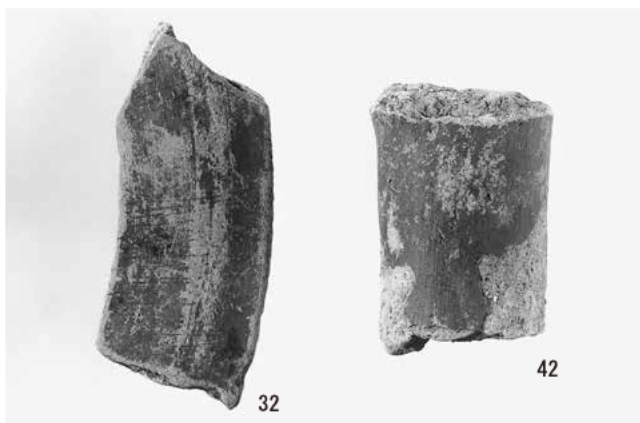
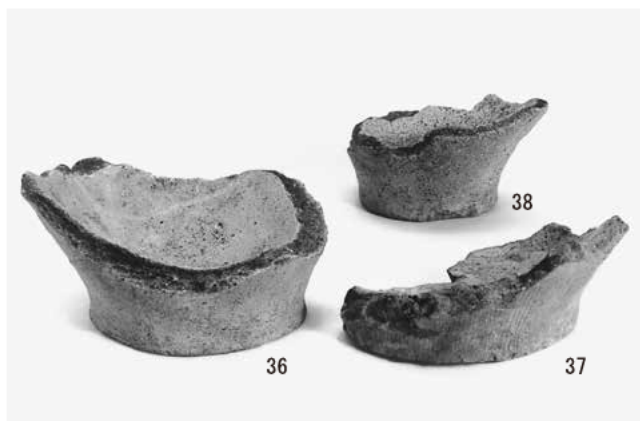
(7) SD1完掘状況(東より)



(8) SD1東壁土層断面(西より)







報告書抄録

ふりがな	あきなりいせき
書名	秋成遺跡
シリーズ名	久留米市文化財調査報告書 第252集
編著者名	江島伸彦
編集機関	久留米市文化観光部 文化財保護課
所在地	〒830-8520 福岡県久留米市城南町15-3 TEL 0942-30-9225 FAX 0942-30-9718 E-mail:bunkazai@city.kurume.fukuoka.jp
発行年月日	平成19（2007）年8月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査の原因
		市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″			
あきなり いせき 秋成遺跡 だい じちようさ 第1次調査	くる め し たぬしまるまち 久留米市田主丸町 あきなり 秋成1234-2	40203	640351	33° 20′ 53″	130° 42′ 48″	061212 ～ 070111	90m ²	携帯電話 基地局建 設

所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
秋成遺跡 第1次調査	集落	弥生 古墳 ～奈良	土坑、竪穴住居 甕棺墓、ピット 溝状遺構	弥生土器 鉄鏃、石剣 須恵器、土師器	弥生後期の竪穴住 居より鉄鏃出土

要 約

田主丸町東部に所在する秋成遺跡の第1次調査。弥生時代中期末から後期前半の竪穴住居、土坑、甕棺を検出。S I 9より纏って土器片、鉄鏃が出土。

溝状遺構は、古墳後期から奈良時代の遺物が下層より出土。弥生土器片は中期前半から後期のものが出土しており、流入であろう。

土木工事の届出日	平成18年11月14日	遺物の発見届日	平成19年1月15日
----------	-------------	---------	------------

※上記の北緯・東経は、世界測地系に基づく値である。

秋 成 遺 跡

久留米市文化財調査報告書 第252集

平成19年 8 月31日 発行

発 行	久留米市教育委員会 福岡県久留米市城南町15－3
編 集	久留米市文化観光部 文化財保護課 福岡県久留米市城南町15－3
印 刷	中村印刷有限会社